**読書感想文の書き方**

**数学科の教諭である私が、読書感想文の書き方なるテーマで本稿を書いていることに、奇異な感じを抱く方も多いのではないでしょうか。確かに普通は、読書指導の係でもない数学の先生にこのテーマで執筆依頼が来ることはないでしょう。執筆依頼が来た理由は、昨年度私が指導した女子生徒が、応募総数約２万４千の栃木県読書感想文コンクールの頂点に立ったからです。経緯を書き、どうしたら評価される読書感想文なるのかをまとめます。**

**昨年度、前任校において夏休み当初に私が電算室（コンピュータ教室）の教師用コンピュータで仕事をしていると、その女子生徒がやってきました。２年生の彼女は、内閣総理大臣賞をとって推薦またはAO入試で国立大学の医学部に進みたいと考えていますので、私に読書感想文の指導をお願いしたいというのです。毎日新聞社と全国学校図書館協議会が主催する読書感想文コンクールといえば、高校生の部だけで６３万人、全体では４７０万人が応募するコンクールでして、運動部の部活動の大会を含めても最大のコンクールです。内閣総理大臣賞とは、最優秀賞です。ですから、高校生６３万人が参加する最もメジャーなコンクールのNo1になりたいというのです。前任校は、全国入賞どころか、県でさえ入賞したことのない学校です。ですが、このとんでもない申し出を私は受けることにしたのです。なぜなら、私は彼女に文才があることを知っていたからです。もともと小論文などの文章の指導が得意で、２つの大手出版社から一般書籍の執筆依頼が来たこともあり、さらに論文が大学のゼミ（輪読）の題材にも採用されたことのある私と、文才があり偏差値をもう少し伸ばしていけば千葉大学クラスを一般入試で合格可能性がある彼女とが組んで、本気で取り組めば内閣総理大臣賞受賞も夢ではないと考えたからです。**

**私の指導原則は、私の意見を押し付けずに、彼女が持っているものを最大限に引き出す、ということです。質疑応答や議論はたくさんしましたが、ソクラテスの助産術のように、基本的には私の意見は言わず、質問することに徹し、彼女が答えを導くようにしたのです。また、添削などで私の筆を入れない、という鉄則を設けました。自分で書きたいという意欲がありありだったからです。**

**指導は、私が最初に予感したように大変楽しいもものになりました。１打てば１０響く生徒であったからです。そして、私の厳しい要求にも決してへこたれることなく、粘り強く彼女は感想文を書き続けたのです。彼女が書いた読書感想文の総量は、400字詰め原稿用紙で４０枚は下らないでしょう。何回も書き直しを命じたからです。**

**最初に指導したことは、読書感想文が評価されるための条件は何かということです。私は、何度何度も忍耐強く問い続けました。一昨年度の総理大臣賞受賞作を研究していた彼女から帰ってきた答えは、「①本の主題を適切につかんでいること②自分の体験を本の主題に関連付け、展開すること③本の主題や自分の体験を社会的な問題とつなげること」の３つでした。これは、私が過去の全国の入賞作品を分析して導いた結論と一致していました。**

**ですから、次に議論したことは、本の主題は何かということです。彼女の選んだ本は、昨年度における課題図書である『路上のストライカー』という本でした。著者は、この本を何を意図して書いたのだろうか、本の主張は何なのか、ということを２人で徹底的に議論したのです。本の主題は、差別解消のプログラムが書いてある・・・ということで２人の見解は一致しました。**

**主題の分析の後に考えたことは、読書感想文の切り口をどうするかということです。彼女と議論をしていて、１年生時から感じていたことが確信に変わりました。彼女は原石であると。私より、深く本を読んでいて鋭い切り口を示したからです。ひとつは、人には先天的に差別を乗り越える力があるということが著者のいいたいことではないか、と言うのです。知的障害者のイノセントが、足の不自由なパッツォンに対して、無遠慮に足はどうしたのか、と聞いて２人は仲良くなります。普通の人なら、配慮して質問したりしません。ですが、配慮こそが差別の原因なのではというのです。先入観から差別が生まれるのではないかと考えたわけです。また、主人公たちが自然保護区で、協力し合う場面が作品には描かれています。人間はハイエナやライオンに狙われるなどの極限状況に追い込まれると、民族や文化の違いを乗り越えて協力し合える・・・というメッセージを生徒は読み込むわけです。自然保護区の描写についても、人間には差別を乗り越える力が、生まれながらにしてあるということの証明ではないか、と考えるわけです。**

**もう１つの切り口は、私を驚愕させるものでした。目の前で母親と祖父を軍に虐殺され、父とは生き別れ、最愛の兄イノセントは南アフリカの暴徒によって命を奪われ、絶望の淵に沈みシンナーにおぼれる主人公デオたちなどどん底にあるさまざまな外国人を率いたストリートサッカー・ワールドカップ・チームの力を、差別を解消する社会的な力の象徴として読み取るというものです。差別とは人類の黎明期から存在するもので、これを解消していくには、問題意識を共有した社会的な集団が精力的に運動を進めていくしかないわけです。様々な方向を向いた諸個人の力を、同一の方向に向けたときにのみに大きな力を発揮するわけですが、個人を集団に束ねるにはチームという強力な磁場＝指導者の指導やチームの雰囲気が必要であると、彼女は考えたわけです。**

**「差別を乗り越えるアプリオリな力」「差別を解消する社会的な力」の２つは、著書には書かれていません。２つのキーワードは、著書を深く読解して、著者に尋ねることによって著者から帰ってきた回答なのです。著書をなめただけではわからない深層を読み解く・・・これは、まさにクリティカル・リーディング（創造的読解）です。この２つの切り口を彼女から聞いた時、内閣総理大臣賞受賞は十分可能性がある、射程距離にあると思い賛成しました。**

**さて、２人で次に検討したことは、読書感想文の構成をどうするかということです。切り口がシャープであってもそれを活かして、構成して表現しなければ内閣総理大臣賞は幻に終わります。２人がこだわったのは、第１段落か第２段落で結論を示唆しておいて、最終段落で結論をまとめるということでした。読書感想文の冒頭で結論が暗示してあって、結論で終わるならば、思いつきで書いたものではなく、結論を見通した首尾一貫した構成で書いてあることを審査員に強く印象付けられるからです。**

**構成を決めてから、いよいよ執筆作業です。執筆は、パソコンで行うことを要求しました。なぜなら、何回も書き直しを命じることになるからです。手書きだと、原稿用紙で４０枚も書き直しを指示するのは、指導者といえどためらいます。手書きだと最初からすべて書き直さなければならないからです。パソコンなら挿入によって簡単に修正できますから、私も遠慮なく書き直しを指示できるのだ・・・と本人に説明しました。完璧を期したい彼女も、承諾しました。**

**パソコンで書いてもらう理由は、もうひとつあります。メールに添付して送れば、学校にいなくてもリアルタイムに指導ができるからです。メールに添付して送付してもらうというのは、小論文や志望理由書などの指導で私が取ってきた指導方法です。段落が仕上がる度に、彼女は、原稿を送付してきました。彼女のやる気が持続するように、必ず良い点をたくさん褒めてから、改善点を指摘しました。すべての段落で、改善意見を述べ何回も書き直しをしてもらいましたが、一番書き直しを命じた部分は、結論の示唆の部分です。はじめ、結論の示唆は、第２段落の主内容になっていて、およそ原稿用紙の１枚を占めていました。私は、送られてくる度に短く簡潔に書くことを要求しました。何回も書き直していくうちに、原稿用紙で１枚あった分量は、２行に圧縮され第１段落末尾に組み込まれることになり、合格を出して次の段落に進みました。**

**どの段落でも指示をしてことは、結論の暗示部分のように短く簡潔に書くことでした。一切無駄な言葉を入れないことを強く要求したのです。すべての段落が、書き直すたびに短くなって行って、合格を出して次に進むということを繰り返したのですが、結論の第８段落を終了した時点で、原稿用紙の分量は１０枚に達していました。この段階で、４０枚程度あった原稿が１０枚に圧縮されたわけですが、読書感想文コンクールの規定は、５枚以内です。**

**ここからがまさに正念場です。彼女は、自分が大事に育ててきた原稿を削らなければならないのです。「自分の愛する子供の命を削るような思いだ。」と彼女は、何度も私に言いました。皆さん、想像できますか。それが、どんなにつらい作業であるか。彼女はこのつらい作業をやりきり、提出期日１週間前には５枚以内に収め、さらに私から合格の２文字を勝ち取ったのです。なぜ、１週間前に完成させたかですって。当然です。読書感想文は、手書きで書くと決められています。清書が丁寧できれいでないと、せっかくの力作が台無しになってしまうからです。人間は、主観の動物です。全国の有名な審査員でも全く同じことです。きれいに書いてあれば、内容がよく見えるし、きたなければよくは見えないからです。清書した原稿に対しても私はGOサインを出しました。**

**この作品を完成させるまで、彼女は大変な努力をしました。なにしろ、夏休みの宿題を前半で終了させ、後半をすべて読書感想文に専念したのです。私の厳しい指導に彼女はすべて応えました。著書を３回は読みなさい、メモを取りながら読みなさい、舞台であるジンバブエの政治情勢やムカベ大統領を調べなさい、他の課題図書も読みなさい、過去の入賞作品を徹底的に研究しなさい、原稿用紙の中におなじ言葉が並ばないようするため類義語を調べなさい、少し背伸びをして専門用語を調べて原稿に入れなさい、などです。専門用語を入れるように指示した理由は、審査員に超高校級の印象を与えるためです。専門用語を完全に消化して我がものにしていなければ、逆効果になり薄っぺらな印象を与えます。ですから、専門用語を入れるという要求は、高校生にはかなり厳しい課題なのです。**

**結果は残念ながら、全国では入賞することができませんでしたが、課題図書の部において栃木県の最高賞である優秀賞を受賞することができました。自由図書の部にも優秀賞が設けられています。ですが、全国の方を過去１１年分について調べると、すべて内閣総理大臣賞は、課題図書の方からの選出であり、自由図書の方は一人も選ばれていません。おそらく、同一図書の読者数では自由図書を圧倒する課題図書から、最優秀賞を選ぶというのが主催者の毎日新聞と全国学校図書館協議会の方針なのでしょう。栃木県は、最優秀賞を選出しませんが、主催者の考え方からすれば、課題図書の優秀賞が実質最優秀賞といえるでしょう。読書感想文の高校生の部の応募総数が約２万４千ですから、約２万４千人の単独のトップに上り詰めたことになります。前任校は、過去に１度も入賞していませんので、前任校始まって以来の快挙を成し遂げたのです。**

**ですが、２人の目標はあくまで内閣総理大臣賞受賞でした。全国の結果が分かった時、私たち２人は、コンピュータ準備室でお互いに謝罪しました。「指導力不足で目標が実現できず、大変申し訳ない。ごめんね。」「私の力が及ばず、先生に内閣総理大臣賞をプレゼントできなくて、本当にすみません。」と。彼女の言葉に、私は涙が出そうになりました。指導者の力不足で内閣総理大臣賞の受賞を逃したのにも関わらず、私に大きなプレゼントをしようと努力して、叶わなかったことをわびているのです。これほど指導者冥利に尽きることはあるでしょうか。**

**思い出話しがだいぶ長くなってしまいました。エピソードの中で折に触れて書いてきた読書感想文の書き方を系統的に詳論して、皆さんが読書感想文を書くときの指針を示したいと思います。読書感想文が評価されるためには、自分の体験を本の主題と関連付け、さらに社会的な問題の中に位置づける必要があります。読書感想文ですから、著者の考えを踏まないで、考えを展開することはご法度です。自分の体験や考えに終始する読書感想文は、同然評価はされませんし、読書感想文を書く意義が半減してしまいます。**

**スポンジが水を吸収するように、物事を吸収できる高校生は、本を読んで自分の世界を広げるべきです。自分の狭い体験や考えにこだわっていたのでは、成長はできません。課題図書をはじめとして、読書感想文の題材に選ばれる本は、高度な思索を展開している本として評価が高いものです。高校生は、第１に著者から学ぼうとする謙虚な姿勢を持つべきです。批判をしては、いけないという意味ではありません。著者の考えに賛成するにしても反対するにしても、著者の考えを正しく把握することが必要不可欠です。正しい理解があって、批判ははじめてできるのです。ですから、まず本の主題は何なのか、これを適切に理解することが読書感想文には求められます。**

**著書を理解するとは、表面をなぞることではありません。私が指導した生徒がやったように、著書の深層を読み解く必要があります。場合によっては、作者でさえ意識していなかった意図を読み取る必要があります。新しい解釈を下すことを、創造的読解とかクリティカル・リーディングといいます。著者から学ぶ究極の方法は、創造的読解によって世界を広げることです。著書を何度も読み、著者の真の意図は何なのか、時代状況に合わせて、場合によっては自分の体験と関連付けて読み取ることが不可欠です。**

**主題を正しく掴んだ後は、読書感想文の切り口を考えます。100人の人が、カントを読むとき、100人のカントを読むといわれています。同じ本でも読み方によって、様々な像が現れます。本の読み方や切り口は、無数にあるのです。ですから、同じ本を題材とする読書感想文でも決して同一になることはあり得ません。そして、切り口こそが、読書感想文のよしあしを決定します。私が指導した女子生徒は、「差別を乗り越える先天的な力が人間にはある。」と「ストリートサッカーのチーム力は、差別を解消するための社会的な力の象徴だ。」の２つを切り口にするよって、栃木県の単独のトップに上り詰めたのです。シャープな切り口を、用意することが問われます。**

**切り口が見つかったら、次に構成を考えます。構成は、文章の命です。構成のない思いつきの文章はだめです。特に、2000字以内という厳しい字数制限がある読書感想文では、効果的な構成を考える必要があります。構成によって、文章の印象はがらりと変わってしまいます。よくドラマにありますよね。物語の中で一番重要な意味のある衝撃的なシーンから始めるというのが。読者や審査員に興味をもって次を読んでもらうためには、魅力のある構成を考える必要があります。**

**そして、その構成は平板な構成ではなく、立体的な構成にする必要があります。例えば、時間の流れの通りに話を展開するのではなく、核となる部分を最初に出すとか、結論を暗示するとか、予想される結論と逆の結論を導くなどです。一言でいえば、起承転結のある構成にするのです。私が指導した生徒は、第一段落で結論を示唆しておいて、一直線に結論を下すのではなく、逆転を用意し、究極の隠し玉である「ストリートサッカーのチーム力は、差別を解消するための社会的な力の象徴だ。」を最後に示して、インパクトのある結論にもっていって成功したのです。**

**次の注意事項は、決して無駄な言葉は入れないということです。2000字というステージは、大変小さな舞台です。字数を無駄にしない・・・これを強く心がけなければなりません。表現は簡潔にすることによって、小さな舞台を最大限に活かすようにしなければなりません。**

**こう書くと2000字も書くことないよ、原稿用紙で５枚なんて書けないよ、という抗議の声が皆さんから聞こえてきそうです。ですが、これは大変な誤解ですよ。ちょっとまとまった考えを展開しようとするとき、５枚はあまりにも短いといわなければなりません。すでに、本稿は４００字詰め原稿用紙なら１７枚を超えています。**

**書くことがない・・・これがみんなの悩みであることはわかっています。ですが、書くことがないなんってこと絶対にあり得ませんよ。なぜ、書くことがなくなってしまうのでしょうか。理由は、とても簡単です。文章とは、基本的に抽象と具体の世界を行き来しながら書くものです。抽象と具体というと難しいと感じてしまう生徒もいるかもしれませんが、一般論と具体例（エピソード）のことです。書くことがすぐになくなってしまうのは、あなたが結論のみを書こうとしているからです。結論なら、１行で済んでしまいます。私が指導した生徒の読書感想文であれば、「差別を解消する社会的な力を育成して、差別解消のために尽力したい」が結論です。男女の友情はあり得るか、の問いに対する答えは、YesかNoしかありません。一般論だけなら、数行で済んでしまうのです。皆さんは、一般論を書こうとするから、書くことがあっという間になくなってしまうのです。でも、結論だけの文章をおもしろいと思いますか。大事なことは、結論に至る過程です。そして、人々が面白いと感じるのは、抽象的な一般論ではなく具体的なエピソードです。どんな体験を積んできて、そう考えるようになったかです。皆さんも、評論文より具体的な出来事が書いてある小説の方が好きですよね（もっとも、私は小説と同じぐらいに評論文も大好きですけどね。結論に至る過程＝論理的な説明が好きなのです。）。読書感想文を書くときに、自分の体験は欠かすことができません。テレビだけ見て考えたことなら、ほとんどの人が退屈に感じるはずです。あなただけの生きた体験があってこそ、興味深い内容になるのですよ。人は、人に深い関心を抱いているからです。**

**次に、社会的な問題との関連に触れましょう。差別、貧困、環境汚染、医療ミス、格差,就職難など私たちの社会には、社会的な問題がたくさんあります。君たちは、社会的な問題を解消するために、学校で学んでいるのだといっても過言ではないでしょう。数学でさえ、社会的な問題を解決するためには、必要不可欠なものなのですよ。君たちからすれば、社会的な問題と数学なんて何の関係もないと、思うかもしれません。ですが、数学も社会的な問題と切り離せないんですよ。スマホなどのIT器機が使えるのは、実は数学のお陰です。機器を設計するのに数学は必要ですし、数学の整数論なしにセキュリティは成り立ちません。リーマンショックの一因は、数学を使った金融工学にあったのです。数学を悪用すれば、大きな社会的な問題が発生します。ですが、数学を正しく使えば、いろいろな社会的問題を解決することもできるのです。**

**すこし、脱線しましたので話を元に戻しましょう。教育格差問題など、私たちが生きている以上、誰でも社会的な問題に直面しています。機会を均等にすれば、結果不平等があってよいなどという乱暴な議論がありますが、東大に入学する学生の保護者の所得の平均は、全大学の中でNo１です。大学の偏差値とその大学に通う学生の保護者の所得は明確な正の相関関係をもちます。傾向としては、所得の高い家の子供たちは、高い学力を得て偏差値の高い大学に入ります。偏差値の高い大学を出た人は高所得を得ます。さらに、その子孫が偏差値の高い大学へと進むという循環を繰り返します。階級の再生産構造がある以上、機会は決して均等にはなっていないのです。**

**社会の中に生きている以上、社会的な問題に遭遇するのは当たり前の話です。高校生の君たちも、社会的な問題の原因と対策を考えるべきものです。社会的な問題があるからこそ、小説家は小説を書くのです。読書感想文は、社会的な問題を考えるための良い機会になるのです。**

**最後に推敲の重要さに触れましょう。前任校において、３年間選考委員をやり、とくに最後の年は選考委員会委員長として、多くの生徒の読書感想文を読みました。主語と述語が対応していない、「やっぱり」などの言葉が１文に複数入っている、同じ言葉が同じ段落に繰り返し用いられている、高校生の表現としては稚拙な表現が並ぶ、などがよく見られました。もちろん、誤字脱字もたくさん見ました。私は、選考委員として読書感想文を読みましたので、クラス代表作品しか読んでいないのにも関わらずですよ。推敲して、主語述語の対応、重複表現、おなじ文末になっている、文体が混在している、などを点検し直していく作業は欠かすことができません。**

**高校生のうちに寝食も忘れて何かに熱中することは、人生をより有意義なものにします。読書感想文は、寝食を忘れて熱中するに値する取り組みです。今年の夏、読書感想文に積極的に挑戦して熱い夏、一生忘れることのできない夏にしませんか。**

**私の第一歩**

**「難民だよ」国連職員の問いに、デオは答えた。この端的な言葉は、悲しくも彼の半生を物語っている。父と生き別れ、母と祖父は軍に虐殺され、最愛の兄イノセントも暴徒により命を奪われた。希望を失いシンナーに溺れ、絶望の闇で苦しむ。酷すぎる舞台設定だが、アフリカの現実だ。著者には、この悲惨な現状を変えたいという強い熱情がある。特に問題視しているのは、差別や排斥、虐殺などだ。文明の黎明期からある差別の解消は可能だろうか。この難題に対する著者の回答は、「ストリートサッカー」に秘められている。**

**差別はなぜ生まれるのか。歴史上で差別が認知され始めたのは、余剰生産物ができ、人間の欲が育ち、階級対立が起こるようになってからだ。つまり、人間の心に余裕ができたために差別の心が芽生えた。差別は親から子へ、人から人へ伝染していく。そして強大な固定観念となり、知らぬ間に差別の連鎖からの脱出が不可能になっていくのだ。**

**私にも、差別の連鎖に囚われてしまった苦い体験がある。小学生の時、体が不自由なクラスメートを内面ではなく外面で判断し、進んで手を貸さなかったり、恩を着せるように手助けをしたりするようになったのだ。彼は不快感を抱いていたに違いない。私と同じ対応をする人も多いだろう。これは、私たちが障害を持つ人々を、蚊帳の外に追いやっていることを示している。世界的な潮流になっているヘイトスピーチを見てもわかるように、新たな差別の形はますます増えている。**

**だが、作品中の自然保護区での出来事は、私たちに差別解消のための蜘蛛の糸を天から降ろしているのではないだろうか。デオ達は、自然保護区でさまざまな困難に襲われる。ハイエナに狙われた時は、イノセントが笛を吹いた故に追い払えたし、ライオンに遭遇した時は、一致団結して生き抜いた。人間は極限状況では協力し合える。人にはア・プリオリに、差別を乗り越える力が存在するのだ。**

**先天的な力を示す要素が、作品内の別の箇所にもある。知的障碍者のイノセントは、足のことを無遠慮に片足の少年パッツォンにたずね、二人は仲を深めた。普通、ハンデキャップがある人には配慮するものだ。しかし、この配慮こそ固定観念だ。人間は既成概念に侵されなければ、差別を生まない。実際、幼少期に障害者と同じ学級で生活すると、差別が生じないことが証明されている。ノーマライゼーションは、差別を廃す有効な考え方だ。**

**差別解消の光は見えてきたが、ジンバブエの現状を認識すると、私たちはまだ、長く暗いトンネルの出口には程遠い場所にいる。ジンバブエは現在も、一年で市場価格が約二三〇万倍になるほどのハイパーインフレや、食糧危機などの課題があり、虐殺や差別を生み続けている。人間の差別を乗り越える力だけでは、どうにもならない現実があるからこそ、デオの絶望的な人生が設定されていたわけだ。**

**デオは緊張と希望に満ちた面持ちで、カメラの前に座り、チームメイトのティージェイと共に、テレビのインタビューを受けている。ワールドカップの前哨戦であるストリートサッカー・ワールドカップに、南アフリカ共和国代表として出場したデオ達は、強豪国を次々と破り、得点王争いをしている二人にマスメディアが注目した。チームメイトのことを難民と言ったレポーターに対し、差別側の中枢にいたティージェイが難民ではない、人間だと反論したのだ。彼を変えたのは、チーム全員と作者の分身ともいえる監督のサリーだった。一度、ティージェイを含む南アフリカ共和国の選手と、デオ達外国人選手にチームは決別してしまう。しかし、代表選手の発表日にサリーは招集をかけ、恐怖と憎悪で再び崩壊しないために、一人ひとりの話が聞きたいと告げる。彼らは、自分の過去について話した。デオと同様に全員が信じがたい苦悩を抱えていた。語られていくごとに、チームの雰囲気が変化していく。それは差別という大きな壁を乗り越え、本当の仲間になった瞬間であった。個人の持つ差別を乗り越えるベクトルは、チームという磁場ではじめて方向を同一にすることができる。問題意識を共有し絆を深めたチームの力は、社会的な力の象徴だ。「みんなが同じじゃないからこそ、ほかのチームより強くなれるんだ！」ミーティングでサリーがかけた言葉だ。多種多様であった人間から差別が生まれたが、その要因の一つである「違い」は差別解消の原動力となる。ストリートサッカーは社会の縮図だ。サリーの言葉は社会全体にも言える。差別の解消は、一人だけでは成し遂げることはできない。世界中に問題意識を展開し、指導者の育成を図り、社会的な力を培えば、人類の未来は明るい方向に転じていくに違いない。だから私は、いろいろな場で問題提起したり、差別解消の運動に進んで参加したりすることで社会貢献し、差別の増え続ける世の中を、少しずつ変えていきたいと思う。**